

ことばのたべもの

宮 原 浩 二 郎

先日、宮沢賢治の作品を書き写しました（「農民芸術概論綱要」1926年）。とても新鮮でした。こころがすきとおるような感じがありました。少しだけ、紹介します。

「風とゆききし 雲からエネルギーをとれ」

「まずもろともにかがやく宇宙の微塵^{みじん}となりて無方の空にちらばろう」

「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」

「正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである」

「^{とも}おお朋だちよ いっしょに正しい力をあわせ われらのすべての田園とわれらのすべての生活の一つの巨きな第四次元の芸術に創りあげようではないか」

どうでしょう。いそいで意味を決めなくていいのです。こころの中で声にして、くりかえし味わってみてください。

よく知られた「注文の多い料理店」の序には、こんな一文があります。「わたくしは、これらのちいさなものがたりの幾きれかが、おしまひ、あなたのすきとほつたほんたうのたべものになることを、どんなにねがふかわかりません」。なんと、賢治は「ことばのたべもの」をつくろうとしたのです。

その賢治自身もまた、まことのことばという「ほんたうのたべもの」を糧として生きた人でした。イエスやブッダをはじめ、「銀河系を自らの中に意識」し、この世を「第四次元の芸術に創りあげ」ようとした、こころの広く深い先人のことばが何よりの栄養でした。だからこそ、37年という短い生涯を、当時の苛酷な東北農村の世直しに、よろこび勇んで捧げることができたのだと思います。

ともあれ今回、道徳の教科書をはるかにこえた、鮮烈な言葉の数々に出会えたことは幸いでした。あまり知られていない宮澤賢治、お勧めします。

（社会学部教授・学部長）